城西の丸に村井豐後城代にてありし時、大納言樣上方より下向被成、御振舞仕候へよし御意にて、豐後難有存じ、御成有之、豐後手前にて御茶を被召上。德山五兵衞・寺西宗與・篠原出羽など謹んで罷在。二間次にて神谷信濃と江守平左衞門と、され言の上にからかひ出し、既に平左衞門思ひ切りたる躰なるを、岡田長右衞門・種善坊中へはいり取さへたり。大納言樣早薄茶に成つた程に、菓子を出し候へと御挨拶被遊をしほに仕、豐後御前を罷立、兩人へ大きに强く異見を申候へば、平左衞門は豐後が取次にて出、信濃は是非共豐後に引廻され候やうに常々申候故、兩人共しづまり迷惑仕。其夜大納言樣御寢被成、信濃を殊の外御よまひ被成。と見ゆ。又慶長四年二月、德川內府と利家樣御中直り、利家樣伏見內府の館へ入らせられし時、御供には德山五兵衞・齋藤刑部・富田下野・神谷信濃・小塚權太夫・村井勘十郎、此六人被召連たり。右世上騷ぎの時分、利家樣にて內談の事を、其日內府方へ聞え候由に付而、德山五兵衞ぬしの手前申ぬけに、神谷信濃を御前さゝへ被申候。其故は家康內に神谷善左衞門と申者は、信濃いとこにて、其に付右騷ぎの時分信濃をばさゝへ被申候。色々物語有之。さて三月八日に內府御禮返しに御越有間、法印許同道にて御越、御雜煮・御吸物にて御振舞。本酌神谷信濃、加へ村井勘十郎致し、御吸物の時勘十郎酌仕、御刀御出し候。さて利家樣閏三月三日の朝御還行、御近所に居申者は、我等顏を見度候はゞ、中の間まで來り水を上候樣にと御遺言の由、上樣・肥前樣より被仰出。信濃・勘十郎兩人罷越、信濃は御抱え申、勘十郎は貝にて水を奉りけり。明る四日、御死骸御遺言の如く長持に入、加州へ御下し被成。御供神谷信濃・橋本宗右衞門也。其頃篠原出羽は金澤より御見廻に被罷登、御供候て被罷下。卯月八日金澤にて御葬禮、御位牌は篠原出羽、ぢんの柱に火を付候は竹田宮內、天がいは神谷信濃、皆々目錄になり肥前樣へ上りたり。此天蓋の事に付き、篠原出羽と神谷信濃と既に喧嘩あらんとする時、寶圓寺堂頭も御出、皆々嘆にて濟みたり。其故は天蓋重く候間、內の者二・三人も爲持可申由、信濃被申に付ての事也。さて頭をそり候は、出羽・信濃・勘十郎三人也。元結を切候は、主水・左太夫・孫平次、其の外にも有之候。御遺言の由にて、肥前樣被仰出は右之通也。以上陳善錄に載せたり。前件の趣共にても、神谷氏は藩祖利家卿御在世中親しく召仕はれし事思ひやられ、薨逝の時および葬送の時などの事にても知られけり。關屋政春の古兵談に云ふ。神谷信濃は、利家卿の子小姓立にて御取立なりけるが、無類の鹽らしき仁にて、茶の湯者なり。利常卿御若き時分、信濃をはじめ彼是四・五人へ御茶下さる。信濃先立す。利常卿露地口まで出させられ、敷居を御拂ひ、何れもへ御挨拶有て、各內へ入りける時、信濃敷居を戴きて入りたりけり。利常卿甚だ御感被成けり。其後江戸にて秀忠公の御茶湯に、利常卿御上りなされし時、卽ち右の首尾になされたり。秀忠公、扨も肥前は珍敷事をせられけり。尤なる事と大方ならず御感ありけり。後に此事を利常卿に尋ねられし方ありけるに、利常卿、神谷信濃といふ家來に習ひたりと仰せられたるよし、菊池大學語る。とあり。三州志巵蘗餘考に云ふ。神谷信濃守守孝男子なき故に、横山長知の三男式部長治を女壻に命ぜられ、神谷式部と云ふ。慶長十年横山因幡卒し、此の時式部を因幡の養子に命ぜられ、因幡遺知の內五千石を賜はり、再び横山とす。然るに寛永六年神谷守孝卒す。遺知九千石の內四百石は、長治の室へ賜はり、三千石は、長治の子式部長昌へ賜はり、命に依つて神谷丹波と稱する處、同廿年長治卒し、遺知一萬石を長昌へ賜はり、命に依つて横山式部と稱す。此の時長昌の弟大藏隆正へ、長昌是まで賜はりし三千石を賜はり、神谷丹波と姓名を改められて、信濃守守孝の後とす。然る處に丹波隆正に子なく、家絕ゆるゆゑに、中川大隅の子治部守易は、丹波隆正の從弟たれば召出され、三千石を賜はり、改姓すべき旨命ありて神谷治部と號す。是卽ち今の治部が家系なりといへり。神谷氏の子孫、後に種々轉變して連綿すといへども、血統早く斷絕して家系存するのみ。

○穴　町

龜尾記に云ふ。此町內は今小家多く、其町條も漸く身を容るゝのみ。故に爾いふ歟と。今按ずるに、穴町は後人の呼び誤りたるものにて、本名は穴生町なるべし。穴生は石積をいへり。國初の頃穴生方の者共、爰に邸地を賜はり居住せしゆゑ、穴生町とは呼びたるなるべし。